

株式会社 奈良事務機
代表取締役

赤羽聰さん

株式会社 奈良事務機

奈良からはじまる中小企業のDX伴走支援へ、「コト」のサービス強化

約60年にわたって事務機販売のリーディングカンパニーとして歩んできた株式会社奈良事務機(奈良市北之庄町・赤羽聰代表取締役)は4月、DX化推進に関する必要項目をクリアした企業が認証される「DXマーク」を、県内で初取得した。同社は昨年、株式会社フォーバルの完全子会社になったことを機に「モノ」だけでなく「コト」のサービスの強化を図る。企業の成長支援に向け動き出した赤羽社長に話を聞いた。

DXマークを省内初取得

ー奈良事務機について。

社歴60年の会社で、主にOA機器、コピー機や印刷機、それからオフィス家具などを取り扱っています。昨年12月にフォーバルの子会社となり、新たに提供しているものが、セキュリティーやネットワークといったIT商材、ITが紐づくような機器。そして、これからメインとなる、「モノ」だけでなく「コト」のサービスを提供しています。

ー「コト」とはどういった内容ですか。

現在、中小企業の経営というのは、やはり「モノ」で解決できるほど簡単な経営ではありません。どちらかというと経営の課題や経営者の悩み。例えば売上拡大ったり、それから業務効率化だったり、それから人の話だったりと。そういう悩みを解決するサービスになります。

ー赤羽社長は、12月に就任され、自社のデジタル化として、まずペーパレスに取り組んだとお聞きしました。

業務のフローの中で紙は、お客様に見積を出す、発注書を貢う、それから納品した後に請求とさまざまなところで出てきます。そして今度は、納品するためメモに発注した伝票を販売管理システムに入力する。販売管理システムに入力するのを次は、経理、会計で入力するんです。一つ一つの業務、販売入力から会計入力、それからお客様への請求見積もり、こういったものに、全て紙が介在しています。要するにデジタル化というのは、要するに

す。ですのでデジタル化の一番の肝は、いかに会社の中の紙をなくすことかということ。恐らく紙の数がデジタル化の達成度になってくると思う

月の頭にはその情報を可視化してお見せしながら、昨年度の売り上げや経費などについてお話しした上で、それを今年度に生かしていく。そういう可視化したものと経営者さんと一緒に見て、意思決定をしています。

ーペーパーレスは、デジタルツールを入れて行うものですか。

ペーパーレスのために、まずデジタルの何かツールを入れればいいかといえば、そうではありません。むしろ、いきなりツールを入れたらほぼ間違いなく失敗します。なぜ失敗するかといふと、新たにデジタルツールを入れることで、今までの運用フローがガラッと変わってしまうからです。

今までの業務で紙を使いスムーズに流れたものが、そのフローを変えることで違う労力が働いてしまいます。そうすると逆に仕事の非効率化を招いてしまいます。そのためツールありきでやっててしまうのではなく、我々はまず、現場の業務を可視化する見える化を行います。例えばペーパーレスなら、業務フローのよなものを書き出し、紙がどこをどう流れいくのかということを可視化し、それを皆で見た上で「ますこの紙を減らせますよね」と、一個一個部分の最適化をしていきます。

ー可視化することは、非常に重要なことなんですね。

「全ては可視化から始まる」と考えています。デジタル化や経営課題解決に取り組む中で、言葉だけの説明ではお互いが見ている場所が違うことがあります。可視化することで間違いなく同じ部分を見ながら、ズレが生じることなく進めることができます。

ー今後の取り組みについて。

奈良で約3万社の企業があります。そのため、奈良事務機だけで全てに対応することはできません。ですから、産官学金で力を合わせることが必要です。今後、自治体や大学などへ、「一緒にDXアドバイザリになりませんか」という話をしに行こうと計画しています。また金融機関であれば、デジタル化ができるところに困っている融資先もたくさんあると思います。産官学金で連携して奈良の中小企業のDX化をお手伝いしましょうということを、これから進めていこうと考えています。

ー最後に奈良への思いは。



奈良の歴史を色々と学ぶため、先日も奈良交通の観光バスに乗り、法隆寺、薬師寺、唐招提寺に行ったり、春日大社をランニングしてきました。奈良というのは日本発祥の地。私はその日本発祥の地の奈良でDXをするために、テーマを「奈良からはじまる中小企業のDX伴走支援」としました。奈良から始めたいんです。よく耳にする「奈良は保守的大とか言われるほど、私はそう思つていません。そういうスピリットを感じています。

ーありがとうございました。